

『農学職 パーフェクト演習講座 昆虫学』(KU12807) 訂正表

2017年4月5日現在

ページ	訂正箇所	訂正内容		掲載日
		誤	正	
P. 26	[No. 7] 肢2の解説	2 × ニカメイガは夜行性で近紫外線、特に青色蛍光灯に誘引される。一般に昆虫の可視領域は300～600 nm で、昼行性の昆虫は近紫外線に、夜行性の昆虫は可視光線によく反応する。	2 × ニカメイガは夜行性で近紫外線、特に青色蛍光灯に誘引される。一般に昆虫の可視領域は300～600 nm で、昼行性の昆虫は可視光線に、夜行性の昆虫は近紫外線によく反応する。	2014/3/20
P. 35	[No. 33] 解説文	<p>1 ○ そのとおり。タバコガの幼虫は、ピーマンの果実内部を加害する。体色は緑で、成熟幼虫は果実から脱出して土に潜り、地表下数 cm のところで蛹化する。</p> <p>2 × スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) は、移植直後の苗を食いつくし、欠株にしてしまう。生長した株では実害を与えない。</p> <p>3 × 名前のおとり翅の部分には黄色のスジが見られる。</p> <p>4 × 成虫は黒色、ほぼ六角形、体長 10 mm、福島県以南の各地に分布し、年1回発生する。冬期は成虫態で越冬し、5、6月頃から水田に飛来し、イネの汁液を吸汁する。これにより、斑点米が発生し、問題となる。北海道にて日本で初めて発見された。</p> <p>5 × 成虫は緑色、前翅先端が雄は黒色、雌は乳白色か黄白色で北海道以外に分布する。冬は幼虫か成虫で過ごし、年3、4回発生。イネの茎葉から吸汁し、稲萎縮病、黄萎病ウイルスを媒介する。多数のイネ科植物に寄生する。葉も食害する。</p>	<p>1 ○ そのとおり。タバコガは、ナス科植物などの嗜好性が強く、若齢幼虫は新芽、蕾、花、幼果などを食害するが、中齢～老齢幼虫は果実の内部に潜り込んで食害する。その後、果実から脱出して土に潜り、地表下数 cm のところで蛹化する。産卵から羽化までの期間は夏場では1ヶ月程度であり、年間3～4世代発生する。9月中旬以降に蛹化した個体は休眠蛹となり、土中で越冬する。</p> <p>2 × スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ) は、1981年台湾から食用として日本に初めて持ち込まれ、養殖場が全国に広がったが、採算が取れずに直ぐに廃棄された。1984年以降、養殖場から逸出したり、廃棄されたものが関東以南で野生化した。スクミリンゴガイは、田植え直後の幼苗を貪欲に食害して欠株にする。しかし、生長した株では実害を与えない。</p> <p>3 × キスジノミハムシは、アブラナ科野菜のみを加害する害虫で、幼虫は土中で根を食害し、成虫になると葉を針で突いたように食害する。成虫の鞘翅は黒褐色で、左右に黄褐色の帯状の斑紋があるのが特徴である。</p> <p>4 × イネミズゾウムシは、アメリカ合衆国からの侵入害虫で、わが国では1976年に愛知県で初めて発見され、1986年には全国に分布拡大した。幼虫は根を移動しながら加害し、土中のイネの根に土繭を作ってその中で蛹化する。夏に羽化した成虫はイネやイネ科雑草の葉を食害し、歩行や飛翔により越冬場所に移動する。</p> <p>5 × ミナミキイロアザミウマは、東南アジアに分布している害虫で、我が国では1978年宮崎県で初めて記録された。以降、ナス、ピーマン、スイカなど果菜類や花卉などを主体に発生しているが、葉などに口針で穴をあけ、唾液を注入して吸汁することにより、加害する。また、キュウリ黄化えそウイルス(CSWV)の媒介もする。</p>	2017/4/5

※「掲載日」は、上掲訂正情報がLECホームページの『公務員 テキスト改訂・修正情報一覧』(<http://www.lec-jp.com/koumuin/kaitei>)に掲載された日付です。